

草にて、うきくさ、又もの類は糞汚に觸ざる故、清潔にして神に供すべしと云り。

〔草木育種後編上〕培養之事

韓詩外傳云、孔子曰、夫土者、堢之得甘泉焉、樹之得五穀焉、喜任○阿接に、土能萬物を生じ、人命の系する處、百果草木都て又地より生せざるはなし。然れども地に高下肥瘠あり、水に寒冷淡鹹あり、若人力の滋培各其宜しきを得ざれば、百果をして盡く欣々として榮へに向はしむるべけんや。古へにいふ、花師の類、園主必ず肥を貯ふるを事とすべし、下條に肥に用ふべきもの數品を擧ぐ、用るもの其好惡にまかすべし、

本肥といふは、人糞十升、水十升合せ、糞窖の中に貯へ置もの也。陳氏云、塘水を和すれば諸水に勝るとといへり。

下肥といふは、金汁一升、水三升和し貯るものなり。

水肥といふは、人糞一升、水七升和し貯ふるものなり。

魚肥 卽魚腥血水といふも同じ、魚の腸又肉又洗ひ玄るを貯へ置ものなり、是亦水を和し貯へ

用ふべし。(○下)

〔花壇綱目下〕諸草可肥事

一馬糞寒氣を痛草に宜し、暑氣を嫌草にも少宛根のまわりへ用也。
用べし、能いりて、一溝水上干て粉にして沙を三分一程交
粉にして用宜し、一魚洗汁用なり、諸草とともに少づ
つて根廻へ、一桂油糟牡丹芍藥の類に少宛用て宜し、一小便懸根廻へ雨の降まへを見合かべき
て根廻へ、一馬便右より少やわらか也、諸草とも少
りな、一茶がら万草に用て宜し、夏中一葉灰さんじこ、青蘭、水仙等に用也、一油糟牡丹にし
て宜しらし、一茶がら万草に用て宜し、夏中一葉灰さんじこ、青蘭、水仙等に用也、一油糟牡丹
用てくらし、其外之草に少、一ごみほこりし牡丹、蓮、河骨、水葵、澤瀉、大かた、此類の草に用て
て宜しらし、其外之草に少、一茶がら万草に用て宜し、夏中一葉灰さんじこ、青蘭、水仙等に用也、一油糟牡丹